

1596 年豊後地震における「かみの関」の津波被害

松岡 祐也*・今村 文彦*・都司 嘉宣**

1. はじめに～豊後地震津波の問題点

文禄五年 (=慶長元年, 1596) 閏七月十二日 (太陽暦 9 月 4 日) に発生した豊後地震は、別府湾内 (現在の^{うりゅうしま}大分市の沖合) にあったとされる瓜生島が津波によって消滅したという伝説で知られている。この地震について、これまででも多くの研究がなされており、各地の被害が明らかにされ、その成果に基づいて震源位置の特定がなされた。その中でも『瓜生島』調査会』という研究グループによる研究は注目される。これは大分県在住の研究者たちが結成したもので、文理の枠を超えた研究活動であった。その成果は『沈んだ島』(1977) という書籍にまとめられている。この研究では、豊後地震について書かれた史料のみならず、「沖の浜」(大分県大分市) という「瓜生島」伝説のもととなった地についての史料も網羅的に収集している。

この研究成果は豊後地震研究で広く利用されているが、大きな問題がある。それは、この研究が「瓜生島」という島の存在を前提にしており、その実在を証明するための研究という点である。別府湾内に「瓜生島」という島が存在したと伝える史料は江戸中期以降のものにしか現れないことが筆者らの研究によって明らかとなっている (都司・松岡, 2011)。また最近の研究では、『豊後府内古図』や各史料から「沖の浜」は島とは考えられていない (鹿毛, 2008)。

「瓜生島」という島の存在自体は伝説であるものの、豊後国府内 (大分県大分市) を津波が襲ったことは同時代史料に見えることから、大きな津波被害があったことは事実であ

る。しかしその一方で、別府湾沿岸以外での地震・津波被害について記した同時代史料は少ない。本論では、豊後地震の被害記事がある同時代史料を利用し、別府湾沿岸以外、その中でも「かみの関」に注目し、この地での地震・津波被害状況について考察する。

2. 同時代史料『玄与日記』

2-1. 記主「玄与」について

本論では、同時代史料の中でも特に『玄与日記』の記事に注目する。まず、この史料について説明しておこう。

記主は阿蘇大宮司の子である阿蘇惟賢とされている。彼は出家して「玄与入道黒斎」と号しており、『玄与日記』の名はここに由来する。彼の父が一族間での大宮司職をめぐる争いに敗れて薩摩 (鹿児島県) の島津義久を頼ったことから、この日記が書かれた当時は島津家に仕えていたという。

勅勘 (勅命による勘当) を蒙り薩摩へ配流されていた前左大臣・近衛信輔 (後に信尹と改名) が、文禄五年 (1596) に赦免されて鹿児島から京都へ戻る際に玄与も随従したのだが、その道中を記したものがこの史料である。

近衛信輔帰洛の道中では、各所で連歌会が行われたようで、『玄与日記』にはその際に詠まれた和歌が数多く記されている。また玄与は、大坂到着後には畿内近国の名所旧跡を巡ったり、細川幽斎や里村紹巴などの文化人に接したりしていることも日記中に見える。そのため、「日記」とあるが、紀行文としての性格が強い。また各地で詠まれた和歌や連歌が掲載されていることから、『玄与日記』は近世初期の文学史上で注目されている。

*東北大学 災害制御研究センター

**東京大学 地震研究所

2-2. 近衛信輔・玄与黒斎の旅程

玄与たちはどのような旅程をたどったのだろうか。『玄与日記』には鹿児島から大坂まで近衛信輔に随従した旅程がすべて記されている。そのルートを図1の上で復元すると、図1のようになる。一方、信輔も自身の日記『三藐院記』に旅程を記している(図2)。ただし、こちらは鞆(広島県福山市)までしか残っておらず、全行程は分からない。

両者の記録には、相違点がある。1点目は内之浦(宮崎県宮崎市)から細島(宮崎県日

向市)の行路で、玄与は海路を、信輔は陸路を進んでいる。2点目は青島(愛媛県大洲市)から鞆の行路で、『三藐院記』では青島から北條(愛媛県松山市)を経由して鞆に向かっているが、『玄与日記』では青島から讃岐国(香川県坂出市)を経て鞆へ向かったことになっている。そして3点目として、両者では庄内(宮崎県都城市)から青島の間で到着の日付が1日前後する地点があるのだ。

1点目の違いは、玄与が海路を先行することで、細島で信輔を迎えていることが史料か

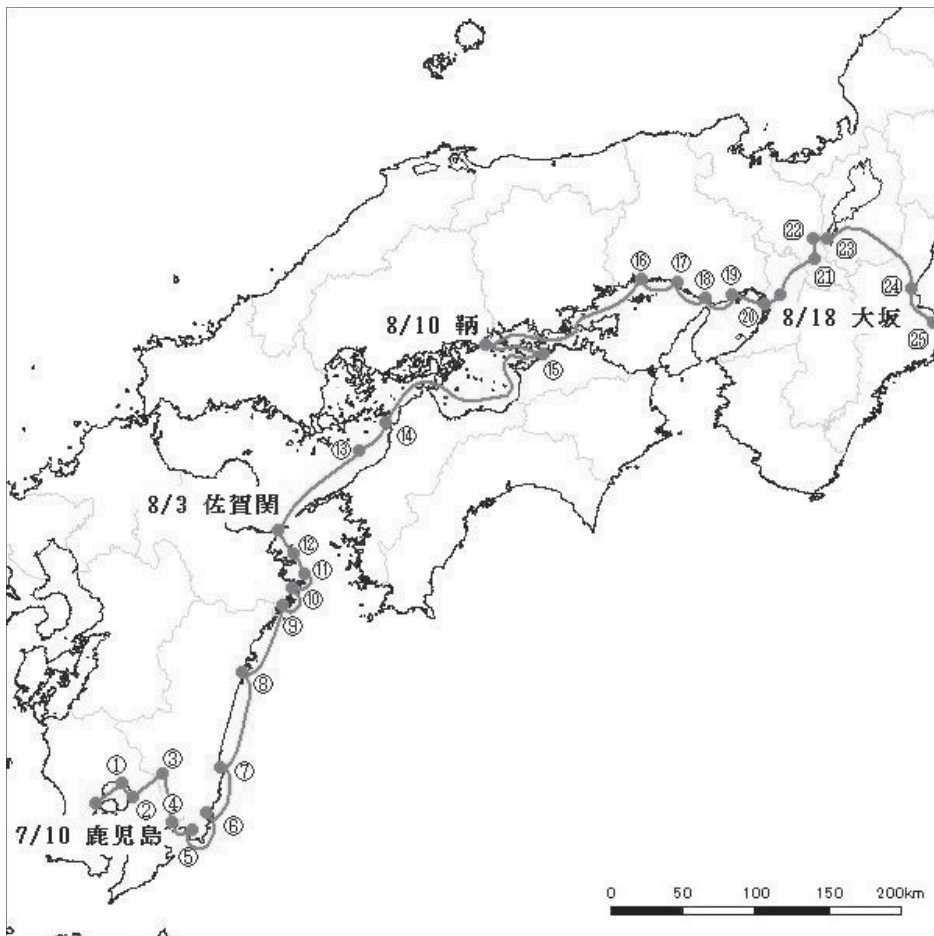


図1 『玄与日記』記事から復元した旅程

1. 浜の市 2. 廻 3. 庄内 4. 志布志 5. 串間 6. 外ノ浦 7. 内ノ浦
8. 細島 9. 内蒲江 10. 米水津 11. 大島 12. 程土島 13. 青島 14. 興居島
15. 讃岐国(香川県坂出市) 16. 室津 17. 高砂 18. 明石 19. 和田岬
20. 難波浦 21. 伏見 22. 京都 23. 大津 24. 安濃津 25. 伊勢山田

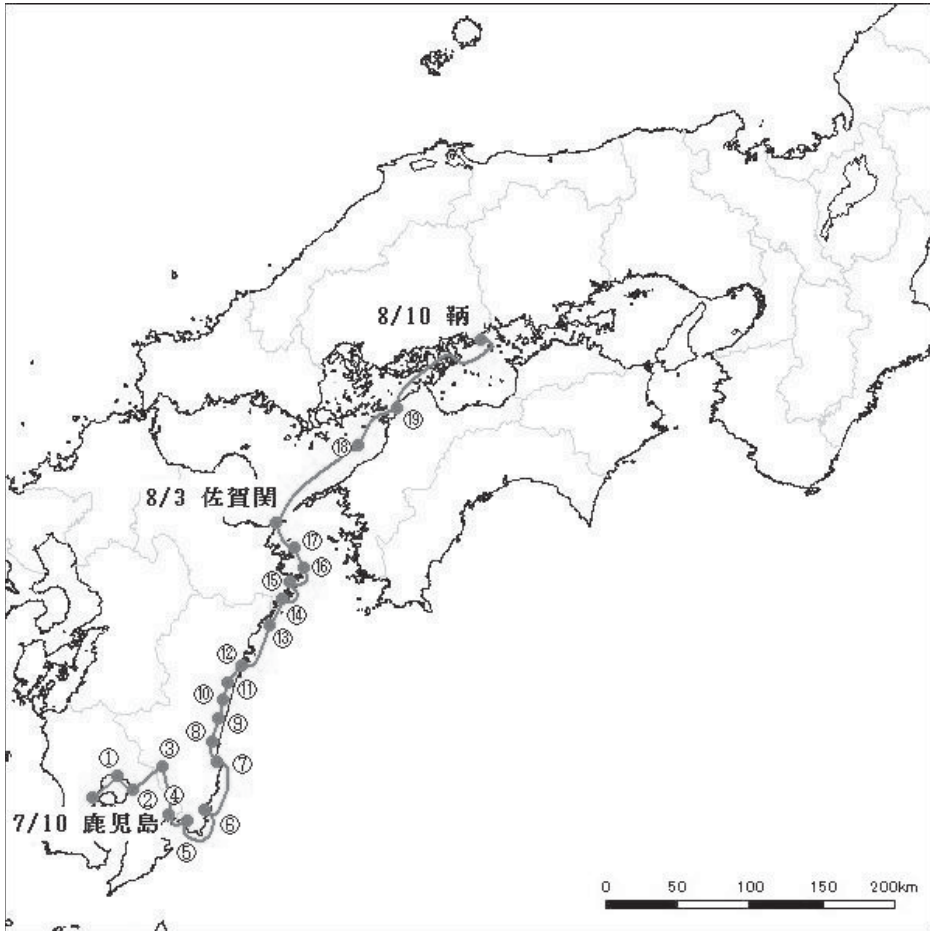


図2 『三藐院記』記事から復元した旅程

1. 浜の市 2. 廻 3. 庄内 4. 志布志 5. 串間 6. 外ノ浦 7. 内ノ浦
 8. 宮崎 9. 佐土原 10. 財部 11. 耳川 12. 細島 13. 島浦島
 14. 蒲江 15. 米水津 16. 大島 17. 程土島 18. 青島 19. 伊予北條

ら分かるため、問題はない。問題なのは2点目の青島から鞆への行程である。こちらは1点目とは違い、史料には先行したことも示されていない。

この違いだが、『玄与日記』での讃岐国一鞆→室津（兵庫県たつの市）という行程は、実際には鞆→讃岐国→室津という行程だったのではないだろうか。『玄与日記』の行程では、一旦西へ戻ることになってしまうが、これならば順調に東へ向かう行程になる。『玄与日記』は玄与が薩摩へ帰国した後に記されたと

される。道中の出来事などはその都度、備忘録のようなものをつけていたと考えられ、帰国後にそれをまとめたものが現在伝えられるものとなったのだろう。『玄与日記』には編纂上の錯誤が含まれている可能性があるといえる。

なお、3点目の違いだが、庄内・志布志（鹿児島県志布志市）間、外之浦（宮崎県日南市）・内之浦間、内浦江・米水津（共に大分県佐伯市）間、大島（大分県佐伯市）・保土島（大分県津久見市）間、佐賀関（大分県大分市）・

青島間, また細島への近衛信輔の到着日が『玄与日記』と『三藐院記』では1日のずれを確認できる。どちらが正しい日付を記しているのかを判断するのは難しいが, これも2点目のようにまとめる際に誤ったものと考えられる。

3. 「かみの関」を襲った津波

3-1. 『玄与日記』の津波記事

同時代史料である『玄与日記』には, 豊後地震津波によると考えられる被害記録が記されている。関連部分を抜粋して以下に示す。

史料1 『玄与日記』(『群書類従 第十八輯』p248)

それよりさかの関迄御着被成候。去七月十二日之地震之時。かみの関と申浦里は。大波にひかれて家かまともなし。いのちを失なふもの数をしらす。哀なる事ともなり。彼須磨の巻に。高塩におちて。むすめをは岡部の里へやり侍ると見えしも。ことほりおもひしられ侍りぬ。

この記事は, 玄与たちが京都への道中に立ち寄った豊後国佐賀関(大分県大分市佐賀関)で聞いた話を書き留めたものである。ここから, 「かみの関」という場所で津波の被害があったことが分かる。それによれば, 津波によって家や竈が流されてしまい, 死者も多数いたという。

史料には「去七月十二日」とあるが, これは「関」の一字が抜けたものと考えられ, 閏七月十二日(太陽暦9月4日)に津波があったことが分かる。藤原惺窩(当時明国へ渡海する機会を得るため鹿児島に滞在)の日記である『南航日記残簡』には, この時期に鹿児島で地震のあったことが見えるが, 閏七月十二日には「大地震(中略)夜又地震」とある。このように『玄与日記』や『南航日記残簡』からは, 閏七月十二日の地震が相当大きかったことが分かる。

『玄与日記』では八月三日に「ほと(程土島,

大分県津久見市)」から船で佐賀関に到着したとあることから, この話は津波から21~25日後に聞いたことになる。

なお, 史料には「彼須磨巻」とあるが, これは源氏物語・須磨巻であり, ここでの「高塩」とは暴風に伴う高潮のことである。

3-2. 「かみの関」はどこか

さて, 日記中の「かみの関」とはどこを指すのだろうか。現在, 3つの地点が候補に挙がっている(図3)。1つは周防国上関(山口県上関町, 市街地は長島(防予諸島の一つ)の北東部先端にある)である。白井(1989)は玄与の旅程をまとめているが, このなかで「かみの関」は山口県上関町かと考えている。また, 松岡ら(2009)も周防国上関が「かみの関」であるととした。2つ目は豊後国上浦(大分県大分市, 関崎(佐賀関半島の先端)の西南方約8kmにあり, 臼杵湾に面している)で, 羽鳥徳太郎(1985)が『玄与日記』の記事を引用して, これを上浦での被害とし, 地盤高(2.2m)から津波高を4mと推定している。3つ目は豊後国佐賀関(大分県大分市)である。松崎伸一他(2011)は佐賀関・上浦・上関について史料とシミュレーションにより比較し, 『玄与日記』のいう「かみの関」は佐賀関であるととした。また, 平凡社の地名辞書でも「かみの関」は佐賀関であるとしている(平凡社1995)。

このうち, 上浦は候補から除外できると考える。先に示したように, 玄与たちは船で程土島から佐賀関へ渡っているが, この航路では上浦近辺を通過している。もし上浦で大きな被害が出ていたならば, 沿岸付近を航行する当時の海路では被害の様子を実見できただろう。また, 地震当時は日向国内にいたのだから, 程土島へ向かう前に被害について話を聞く機会があったはずだ。それ以前に, 上浦は「一尺屋」という村の一部にすぎず, それよりも大きな蒲江や米水津が「人家すくなき浦」(『玄与日記』)であることから, 上浦が話題に上るような大きな集落だったとは考えにくい。以上のように考えれば, 上浦を「か



図3 「かみの関」の候補地点

みの関」とすることはできない。

残り2地点が候補となるわけだが、当時何と呼ばれていたのかを確認してみよう。天正十六年に京都から鹿児島へ向かった薩摩の大名・島津義久の日記を見ると、「上の関」という地名が現れる。

史料2『島津義久上洛日記』（『鹿児島県史料 薩藩旧記後編2』p412）

一廿二日、日向泊をとらの刻御出船、(中略)
 此夜戌刻上の関御着也、夜中ハ御塩懸にて、夜明村へ被成御座、
 一廿三日、上の関江天気あしきにより御逗留、阿弥陀寺と云寺へ御宿なり、(後略)

この「上の関」は現在の山口県上関町を示す。これは、史料中にみえる阿弥陀寺が現在も上関町に存在する寺院であることから明らかである（図4）。上関には瀬戸内の海賊・村上氏の一族の城があり、そこには海関が設けられていたという（藤田2012）。上関は当時の瀬戸内海航路の要地の一つだった。

一方の佐賀関であるが、先の島津義久の日記には佐賀関も出てくる。彼は寄港せず通過しただけだが、そこでは佐賀関を「さかの

関」と書いている。また、『南航日記残簡』にも寄港地として「嵯峨関」と出てくる。『三藐院記』にも京都から薩摩へ下る途中、文禄三年四月二四日条に「さかの関_下着」と佐賀関が現れる。この「下」は下浦（佐賀関の白杵湾側の集落）のことを指すのだろうと考えられる。もしかすると、下浦を「下関」と呼んだ可能性もあるが、ここからは分からない。なお、文禄五年八月三日条では京都への途上の寄港地として「さかの関」とのみ書かれている。このように同時代史料では、佐賀関を「かみの関」と呼ぶものは見あたらない。佐賀関を「かみの関」と呼ぶ史料として、松崎らは『雉城雑誌』を挙げている。

史料3『雉城雑誌』（『沈んだ島』p207）

此日ノ災害、此地ノミナラズ。事ハ阿蘇宮神主齋玄与日記、(中略、『玄与日記』の記事を引用する)是即チ、此地地震水災ノ事ヲ記サレシ也。按ニ、此水災ハ、閏七月二日ナルヲ、此書ニハ七月十二日トアリ。蓋シ閏ノ字ヲ脱スルカ、右ノ上ノ関ト云ハ、今ノ上ノ浦ト云地也。

この史料では、『玄与日記』の記事を引用



図 4 上関 (山口県上関町)

図は国土地理院の電子国土地図による。中央北に突き出た山上に上関城があった。丸で囲んだ寺院は、島津義久が宿泊した阿弥陀寺である。

した上で「かみの関」は「上ノ浦」であるとしている。松崎らはこれを佐賀関上浦（別府湾側の集落）と考えたようである。確かに史料 3 を参考にする限り、佐賀関が「かみの関」であると考えてしまうかもしれないが、史料 3 は天保年間に編纂されたものであり、地震後 200 年以上も経過していることになる。そして、この史料の他には、同時代史料以外でも佐賀関を「かみの関」と呼ぶものはないのである。

以上から考えると、豊後地震当時「かみの関」と呼ばれていたのは佐賀関ではなく周防の上関だということになる。そして、『玄与日記』の津波被害記事は上関の被害を指しているという結論に達する。

3-3. 「かみの関」被害の実態

『玄与日記』には上関が津波によって大きな被害の出たことが記されている。では、上

関では本当にこのような被害が出たのであろうか。このような疑問を投げかける史料がある。

史料 4 『日本往還日記』 閏八月九日条 (『日本庶民生活史料集成 第 27 巻』 p121)
初九日癸酉、この日晴。暁に発航し、夕に上関に到る。関、下関と一様に繁盛し、館舎甚だ宏敞なり。守倭は毛利、これ大将の位の高き者、方に国都に在り。守倭に代り、接待頗る心を尽し、酒饌を呈せらるるに甚だ豊厚、他処に倍す。乃ち毛利の分付せる所と云ふ。

この史料の記主は黄慎で、朝鮮出兵（文禄の役）の講和交渉のために朝鮮から日本を訪れた使節の正使を務めた人物である。日付は「閏八月」とあるが、これは当時の日本では八月にあたる。彼が上関を訪れたのは地震から約 1 ヶ月後のことであり、玄与が佐賀関で

話を聞いた時期とほぼ一致することになる。この記事では上関はまるで何の被害もなく無事だったかのように書かれており、『玄与日記』の被害記述とは全く異なるのだ。

もし上関で『玄与日記』にあるような津波被害があったとするならば、約1ヶ月で地震以前（あるいはそれに近い位）の復興を成し遂げていたことになる。そのようなことが可能だったのかは分からないが、そうでないとするれば、上関の津波被害はそれほど大きいものではなかったことになる。

上関の津波被害はどれ位だったのか。約1ヶ月で復興が成されていないとした場合、2つの可能性が考えられる。1つは、『玄与日記』にあるような大きなものではなく軽微だった可能性である。先に『三藐院記』との航路の違いから、『玄与日記』には錯誤があった可能性を示したが、ここでも錯誤があったことが考えられる。例えば、佐賀関で聞いた津波の話として、上関の軽微な被害と沖の浜など他所の大規模な被害があり、後に日記をまとめる際にこの両者が一緒になってしまったのではないだろうか。

もう1つは、上関の海関部分の被害ではなかった可能性である。史料4には「館舎」とあるが、これは上関城を指すと考えられる。ここで「繁盛」とあるのは、上関城とその付近にあった海関のことであろう。恐らく、『玄与日記』にあるような被害は、その海関のあった場所ではなく島の南側（図4中の上関漁港（沖の浜）とある辺り）だったのではないだろうか。史料4の記主・黄慎はその被害のあった場所を見ていなかったために、津波被害は記されていないのだろう。

いずれにせよ、上関には豊後地震による津波が到達し、被害の出たことが佐賀関まで伝えられていたのである。ただし、『玄与日記』にあるような被害が実際にあったのかについては、まだ検討する余地があろうと考える。

4. おわりに

『玄与日記』上で唯一の地震・津波被害の

記事中にあらわれる「かみの関」は周防国上関であるとの結論が出た。しかし、この他にも玄与黒斎自身が地震の揺れを体験していたことを示す記事が存在する。八月十八日、無事大坂へ着いた玄与はその道中について「地震の折節。浪たかく風はけしき海上。つゝかなく侍りつること。仏神のまもりうたかひなくおもひはへりぬ。」と記している。これは「地震の折節、海上は波高く風も激しかったが、無事でいられたのは、仏神がお守りくださったからだ」という意味だが、道中の浦々に泊まった際にでも揺れを感じていたのだろう。また、大坂に近づくにつれても感じていたとすれば、同年閏七月十三日に発生した伏見地震の余震も経験していたことになる。

豊後地震について書かれた同時代史料が少ないなかで、『玄与日記』は大変貴重な情報を与えてくれる史料である。僅かな記載であっても、このような情報を少しでも増やしていくことができれば、豊後地震の新たな姿を見出すことができるのではないだろうか。

なお、本論は、(独)原子力安全基盤機構からの委託業務「平成22～23年度津波痕跡データベースの高度化—痕跡データの信頼度の評価—」(代表：東北大学 今村文彦)の成果の一部を取りまとめたものである。

参考文献

- 藤田達生, 2012, 秀吉と海賊大名, 中央公論新社 (中公新書)
- 羽鳥徳太郎, 1985, 別府湾沿岸における慶長元年(1596年)豊後地震の津波調査, 地震研究所彙報, Vol.60, pp429-438
- 平凡社地方資料センター編, 1995, 大分県の地名, 平凡社
- 平井聖ほか編, 1980, 日本城郭大系 第14巻 鳥取・島根・山口, 新人物往来社
- 鹿毛敏夫, 2008, 川からの中世都市, 戦国大名大友氏と豊後府内, 高志書院, pp59-86
- 鹿児島県維新史料編さん所, 1982, 鹿児島県史料 旧記雑録後編2, 鹿児島県

- 国民精神文化研究所編, 1941, 南航日記残簡, 藤原惺窩集 下巻, pp377-389 (1978年に思文閣出版から復刊されたものを使用)
- 松岡祐也・今村文彦・都司嘉宣, 2010, 『玄与日記』に記された文禄五年(1596)豊後地震による周防国上関の津波被害, 歴史地震, 25, p131
- 松崎伸一・川崎真治・荻山和樹・西谷淳・土屋悟, 2011, 『玄與日記』が記す「かみの關」地点はどこか(1596年豊後地震), 第28回歴史地震研究発表会講演要旨集, p26
- 白井忠功, 1989, 黒斎玄與の旅—『玄與日記』—, 立正大学人文科学研究所年報, 27, pp14-20
- 谷川健一, 1981, 日本庶民生活史料集成 第27巻 三国交流誌, 三一書房
- 都司嘉宣・松岡祐也, 2011, 文禄五年閏七月十二日(1596年9月4日)豊後地震津波と瓜生島伝説について, 津波工学研究報告, 28, pp153-172
- 「瓜生島」調査会編, 1977, 沈んだ島 別府湾・瓜生島の謎, 「瓜生島」調査会
- 続群書類従完成会編, 1975, 史料纂集 三藐院記, 続群書類従完成会
- 続群書類従完成会編, 1977, 群書類従 第十八輯 日記部・紀行部, 続群書類従完成会